

臥龍桜

Garyuzakura

語り手 大江哲雄

聞き手 山本真紀

企画:高山市

取材日:令和3年11月25日

臥龍桜の異変

高山高等学校時代の同期が 245 人おりましたけど、すぐに大学に進学したのはひとりだけでした。みんな大学に行ける経済状態じゃなかったんです。食べる物もないくらいですから。でも、それをかわいそうとかみじめだとか思わない時代でもありましたね。私は宮小学校を卒業して、旧制中学校に行きました。その後は、手に職をつけた方が良くだろうという父のアドバイスを受けて、技術を習得する為に北海道立滝川種羊場で 2 年間学びました。北海道の冬は、本当に寒くて冷たい。実際、気温がマイナス 31 度になったこともありました。北海道で学んだ後は、岐阜県の職員になりました。研究職です。まずは、清見にある現畜産研究所に入って 20 年ほど勤務しました。その後は飛騨県事務所で畜産の係長を 4 年ほどやり、下呂に異動になった後、岐阜県庁に行き、下呂総合庁舎へ畜産課の課長として戻ってきました。岐阜県の職員を退職した後、2 年ほど経済連で技術主幹として勤めてから宮村の村長選に出馬しました。私が、宮村の村長になったのは、平成 6 年です。61 歳の時でした。

平成 3 年の 8 月に臥龍桜の葉っぱが半分ほど落葉しました。こんなに早い時期にたくさん落葉するのはおかしいことなので、これは、きっと、何か原因があるなと思ったんです。実は、少し前の台風でおよそ 30 センチの桜の枝が折れていたんです。役場の人達が、その折れた枝をなんとかしようと、樹木の専門家といわれる先生を呼んできて、桜の枝の手当をしようとしていたところに出くわしました。まだ、私が村長になる前のことだったので、役場の中のことは全くわかりませんでしたけど、役場の職員に枝の手当は全く必要ないのではないかと言いました。枝の手当をしても、何ら意味がないと思ったからです。その時は、当然、反発もありましたよ。

その後、平成 6 年に宮村の役場に村長として入りました。村長になる前は、岐阜県の職員として飛騨牛の研究をしていました。元研究職という仕事柄なのか、先天的にそうだったのかわかりませんが、何か変化があるとその要因は何であるか徹底的に調べる癖がついていたんでしょうね。とにかく、臥龍桜に何かが起きている。何かがおかしいと思い、次の日から桜を観察することにしました。毎朝 4 時半から 7 時半頃まで、桜の木をじっと見ていました。マイナス 18 度の中で見ていたこともあります。しばらく観察を続けていると、不思議なことに気づきました。桜の木に鳥が近づかないのです。本当にただの 1 回も近づかないんですね。桜の木の周りには枯草なんかが残っています。普通なら鳥がそこにいるミミズや虫をつついて探したり、木の枝に止まったりするんですけど、そういうことが全くないんです。以前、私は、ウソという鳥を退治する仕事をやったことがあるんです。それで、鳥の行動についてわりと慣れ



大江哲雄
昭和8年2月23日生

プロフィール

旧大野郡宮村(現 高山市一之宮町)生まれ

<学歴>

昭和26年 高山高校卒業

同年北海道滝川種羊場研究生として2年入所

<職歴>

岐阜県種畜場(現 岐阜県畜産研究所)入所

飛騨県事務所係長 益田県事務所係長

岐阜県庁畜産課肉畜係長

益田県事務所畜産課長 飛騨県事務所畜産課長

肉用牛試験場場長

岐阜県参事を経て 退職

岐阜県経済農業協同組合連合会技術主幹として勤務

平成6年 宮村村長として合併まで10年6カ月勤務

この間、全国各地に講演 40カ所に及ぶ

<資格>

技術士、農業改良研究員、農業専門技術員、
農業改良普及員

<委員>

全国和牛登録協会中央審査員

てましたので、これは益々おかしいぞと思って見ていました。ある時、山鳥と雉がやって来ましたが、どういうわけか桜の木のところ近くに近づくと駆け足でビューンと走るんですね。まるで桜の木を避けるように超駆け足になるんです。もしかしたら、桜の木に何か原因があるんじゃないかと思って、このことを役場に言いました。しかし、役場には桜や鳥の専門職がいません。当然ですが、原因がわかる人がいませんでした。

そこで、原因を探そうと桜の根元の周辺 10 カ所くらいを掘ってみたんです。しかし、掘ってみても原因らしいことはわかりませんでした。次に、古くから桜を知っている人に桜の木の周りに何かやったんじゃないかと聞いてみました。そうすると、昭和 60 年頃、根の周りに赤土を埋めていたことがわかりました。実は、赤土は、空気が通りにくい性質があるんですね。つまり、桜の根の周りの水分が多くなり、また、通気性がない状態になっているのではないかと考えました。そこで、思い切って赤土を取り除いてみることにしました。

平成元年、竹下登さんが首相の時に「ふるさと創生 1 億円事業」で地域振興の為に各市町村に一億円が交付されました。宮村も一億円いただきました。当時、宮村では、そのお金を臥龍桜の復興に使ったんです。桜は、肥培管理をしっかりとしないと駄目な植物です。言って悪いかもしれませんが、この時、桜の手入れをした業者には、庭師の資格のある人がひとりおっただけで、その他の人は桜に関する知識がほとんどない人ばかりでした。もちろん、役場の職員にもわかる人がいません。残念ながら、その時に臥龍桜の復興等を担当した人達は、桜に関する知識が豊富ではなかったんですね。そのことも少なからず桜の衰退に影響があったのかもしれないですね。



村長時代

「セラミック炭」で桜復活へ

私は平成の大合併前の首長ですから、思いっきりやれるだけのことはやりましたね。平成 6 年に村長に就任した時は、臥龍桜の花は最盛期の三分の一以下になっていました。薄く咲いて、早く散ってしまうんです。その要因を取り除くために、赤土を取り除いて、代わりに「セラミック炭」という炭で埋めました。この「セラミック炭」は、すごいんです。植物の根の生育を促進するんです。実際に、役場で「セラミック炭」を使った水耕栽培の検証実験をして、毎日観察しました。どのくらいの濃度が一番、根の発育にとって良いのかも調べました。その時の実験から「セラミック炭」は根の生育促進の効果が大きいという結果を得ました。本当にいろんな事をやらせてもらいましたが、やっぱり、実際に調べて検証することは大事です。データや根拠はとても大切ですからね。

災害に対する管理の為、河川の近くにある不要な木の処置、植林期間伐材の処置方法のひとつとして、「セラミック炭」の製造を林野庁に提案しました。具体的には、伐採した木を炭にして、山に返すか蔬菜に利用したいという事を提案しました。これが採択され、「セラミック炭」が生産されるようになったんです。

「セラミック炭」は、水はけ、水持ち、通気性が良くなり、植物の生育を促します。桜の周りの赤土を掘って、代わりに「セラミック炭」を混ぜた土を埋めていきます。土に混ぜる「セラミック炭」は、容積でいうと半分くらいですかね。炭を混ぜますから、色は真っ黒です。そして、その後、桜の根がどうなっていくのか、根は張ったのか、水は溜まっているのか、ミミズ等はあるのかを観察します。どう変化したのかを調べる為に毎年掘ってみましたね。5～6年経つとミミズが出てきました。きっと、以前の赤土だった時は、桜の根元に、虫もミミズも何にもおらんもんですから、鳥は駆け足で走って行ったんでしょう。もう少し土を掘って、根の発達を調査しますと、「セラミック炭」のおかげで、根も確実に伸びてきましたね。



花も少なく、全体的にさみしい(平成8年4月)

調査・分析からの実現

桜の周りを調査する時は、なるべく根のあたりの土を踏まないように気を付けています。極端なことを言うと、根の上を踏むと土の中の空気を遮断してしまいますし、水の流れも変わるかもしれません。調査する人は、なるべく体重の軽いフライ級で、作業が丁寧で飽きない人ばかりを集めました。宮村に桜の絵を描く画家の方がいましてね。桜の絵を描くくらいですから、植物を観察する力があるんですね。その人には、桜の様子をじっくり観察してもらっていましたよ。観察要員は、岐阜大学の大学院の林学部を出た人をお願いしました。彼は現在、高山市の林務課の課長をやっていますよ。本当に桜の観察に相応しい、良い人達がいきましたね。

桜の根もだんだん伸びてきました。さらに10年目には、ミミズもだいぶ増えてきて、とうとう平成14年に臥龍桜は満開になりました。早い時期に葉も落ちません。約8年間で、臥龍桜は、完全に復活しました。桜の復興については、当時岐阜県知事だった梶原拓さんがいろいろと関心を持って協力してくださってありがたかったですね。

令和2年の12月に、念願の宮トンネルが完成しました。私が村長になってすぐの平成6年、国土交通省に宮トンネルを作ってほしいと要望に出かけました。この時も、宮峠に関するいろんな状況を調べて、データにしました。でも、どうしても数字だけじゃわかりにくいでしょうから、例えとして、宮峠は冬の寒い時期は、凍結してボブスレーのコースみたいになって、とても危険なんだと話しました。実際に一番凍結して危険になる2月に宮峠の現地視察に来てもらったりもしました。本当に冬の宮峠はしょっちゅう事故が起きていましたから。ちょっと気になって、事故発生率を調べてみたら、宮峠の事故発生割合は、一般の道路の4.7倍だったんですね。このデータだけでも宮峠が危ないことがわかります。しかし、いくら危ない道路だといっても、ご存じのように公道を新しくするっていうのは、本当に難しいんですよ。その後も要望を出し続けました。宮トンネルを作る許可をもらうのに10年かかりました。さらに着工するまで10年です。そして、宮トンネルは、工事開始から5年で完



桜花も多くつき、木にも躍動感がみなぎる(平成16年4月)



成しました。
桜の里へ

実は、平成 14 年に NHK の BS 放送で宮の臥龍桜について取り上げてくれました。全国放送です。そしたら、その年に 15 万人ほどの来客がありました。NHK のおかげで、全国的に宮は桜の里として知られるようになって、本当にありがたかったですよ。

私の父も、私の前の前に村長をやっていました。「臥龍桜」という名は父が付けたんです。父は桜の種から桜の木を増やそうと、ひとりで努力していましたね。実は、桜は、なかなか種から育たない植物なんです。父は、桜の木の周りにシートを敷いて、そのシートに落ちた種を拾って、それを蒔いていました。ひとりで肥料をやって、ひとりで雑草を退治していました。そうやって、父は、ひとりで桜を育てていました。本当によく働く人でしたね、父は。

実は、宮では、父の村長時代に、独自の方法で桜の種を 100% 発芽させることに成功したんです。これはすごい事なんです。プロの庭師の方でも、3 割以上発芽できれば良い方だそうです。種から育てた桜の苗を昔お世話になった方なんか配ったりもしましたね。



子ども達に桜の種を見せる父

源流は心の鑑

ずっと以前から、山の水は大事だということを訴え続けているんです。「森は水。水は命。」です。やはり、水はすべての命です。水がなくては生きていけませんから、動植物もみんな水は大切です。宮の奥の方に防災ダムがあるんです。私が村長の時に、この防災ダムを直したことがあります。具体的には、ダムの面積を広くして水が貯まるところを倍にしましたですね。当時、防災ダムを直す工事は、宮村が、全国で初めてだったようです。

昔は、いらない物を川に捨てるっていう習慣があったんです。ある時、川に捨てられたゴミを拾う活動をしようってことになりました。しかし、私は、捨てられたゴミを拾うことが大切ではなくて、まず、ゴミを捨てさせないことが大事じゃないかと思ったんです。「源流は心の鑑」ですよ。川の水が綺麗じゃなければ、そりゃ、その上流に住んでいる人やそこに住んでいる人の心が汚れているんじゃないかと考えましてね、根気よく川にゴミを捨てないように訴え続けたんです。そしたら、やはり、5～6 年で川にゴミを捨てる人はいなくなりました。よく、マスコミなんかゴミを拾ったことを美化して取り上げていますが、そんなことより、ゴミを捨てなかったことをもっと評価すべきじゃないかと思います。ここより下流に住む人達に対しての私たちの贈り物は綺麗な水です。だからゴミになるものを捨てるのはやめてほしいね。

宮川に鯉がいますよね。鯉は外来種で、その上、とても長生きします。元々、宮川に鯉はいなかったのですが、人間が放流したから、宮川には鯉が住んでいるんです。以前、朝、宮川で野菜のくずなんかを川に流す人を目撃しました。当人に、何をしているか聞いてみると、「鯉に食べさ

せる為に野菜くずを流している」と言うのです。鯉が食べなかった野菜くずは川を汚し、ゴミになるので、その行為は川の水を汚していることになりませんかと尋ねましたら、何を余計なことを言うかと怒っていました。どうしても新しいことをいうとね、批判されることが多い気がします。ちょっと排他的なんではなかね。

感性と歓声がこだまするまち

子どもはとても純粋です。しかし、大人になる過程でどうも純粋じゃなくなる気がしますね。どうしても、子どもの良いところを伸ばすより、悪いところを怒ることが多くなりますからね。でも、女性はなるべく、子どもの良いところばかりを見ようとしますよ。悪いところがあっても、悪いところが全てではないってね。以前、宮崎県のある町に講演に行ったら、女性ばかり 1800 人のお客さんが入りましてね。その時、会場の皆さんに「あなたは、何を頼りにしていますか」と尋ねましたら、「気持ち」だって言うんですよ。やはり、いい発想とか、いい提案っていうのは女性が持っていますよ。お寺で話す機会がある時は、女性の感性をもっと広めてほしいって言います。女性は、遠慮しないでどうでもいい話をするから、長生きするんですって。女性の感性は素晴らしいんです、本当に。高山市が市町村合併を記念して、『宮村よ、ありがとう』という冊子を作りましたが、女性好みに臥龍桜と生き雛様の写真を使いましたね。もちろん、臥龍桜の写真は大きく載せましたよ。

毎年、宮小学校の 6 年生に臥龍桜の話をしに行きます。また、全国へ講演に出かける機会もありましたよ。名古屋営林局とか名古屋経済会などでも講演しましたが、聴いてくださる人は偉い方ばかりでしたね。また、石垣島の講演では、原稿なしで 2 時間喋ってきました。実は、26 歳から 6 年ほど NHK ラジオで話していたんです。例えば、牛は夜生まれることが多いとか、ロープを一切使わずに手だけでお産させた時の様子等の牛の話です。

私が、牛の研究を始めた頃、牛は、2 間 3 間くらいの仕切りの中で 1 頭ずつ飼われていました。この飼い方ですと、仕切り毎に餌をやったり、掃除をしたりしなくてはなりませんから、牛の世話に時間がかかります。そんなわけで、たくさんの牛を飼育するのに向いていませんでした。そこで、畜産農家に飼育の実態を聞き、根気よく牛や飼育方法を観察しました。その結果を元に餌の回数を始め、サイロなど飼育環境を整えた飼育方法を発表しました。私が 20 代の時でした。その方法が広く広まり、現在の飼育スタイルになり、一度に 1000 頭以上の牛を飼うことが出来るようになったんですよ。

臥龍桜については、これからも、適切な管理を続けてほしいなと思いますね。臥龍桜の保存会はありますが、あまり活発に活動して目立つと足を引っ張る人が出てくる。どこにでもそういう足を引っ張る人がいるのは残念ですね。以前は、臥龍桜の日本画展を毎年やっていましたが、ここ最近は、3 年に 1 回になりました。そして、地域の人の出展数がず



宮村よ、ありがとう

いぶん減りましたね。やはり、地域の人にもっと出してほしいですね。

今、思うと、当時の私は村長として、新しいことばかり言うもんですから、職員にとってはきつく見えたのではないかと思います。私は、批判の多い村は成長しないと思っています。そして、これはあながち間違いではないと思っています。実際、人が育っているかどうかというと、あまりこの地域は育っていないのではないかな。「人を育てる」のは、根気ですね。そして、誰かが火をつけなきゃ、燃えません。やはり、きっかけは大切ですね。

伝統や文化って一人前のことをいいますけど、これはもうどこにでもあるものですからね。私は、山をもっと活用したまちづくりの方がいいんじゃないかなって思っています。山には、水が出ますからね。もうね、どう動いていいかわからない人が多いです。足元だけ見ている感じの人が多いですね。これからは、学問が非常にできるよりも感性を豊かにするように持っていかないとね。いくら学問がよく出来ても、目標には到達できないですよ。よく、「人育て」って生意気なことを言いますが、私は、「人探し」でいいと思うんです。必要に合わせた「人探し運動」ね。「人作り」なんてなかなかできませんよ、本当にね。残念ですが、今の高山市には歓声がない気がしますね。やっぱり、「感性と歓声がこだまするまち」がいいですね。

